

教 仁 名 聞

第37号
(発行日)

2013年10月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/~souan/

《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日 午後2時始。

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日と12日午後3時始

○ 〈聖典学習会〉

毎月6日午後7時始。

○ 〈真宗入門講座〉

毎月18日午後6時30分始。

* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

因縁にしたがう生活

《 念佛寺報恩講 》

十二月二十二日 (金)

午後二時始

ご講師 大谷派教学研究所所員

高間重光 先生

*なお、同日十二月二十二日は
午前十時より勤行・法話(念佛寺住
職)があります。

私の人生で最初の仏法の師といえるお方は、大分県臼杵市の善法寺の住職をしておられた佐々木蓮磨師であった。高校時代に師の著『仏の愛の庭』という本にであって、それが縁で大谷大学の真宗学科に入学した。入学した春に東本願寺の前にある総会所でたまたま師のお説教が4日間ぐらいあり、初めてそこでお目にかかったのである。当時師は六十代後半のお歳であった。風貌はだれが見ても尊い仏教僧という感じであった。師の法話は、難しい内容ではなく、また聴衆の心に入り入ろうとする作為もなく、あるいは人を感激させて泣かせるという風もなく、いくつもの例話をあげて、真宗信心の要をお話になった。真宗の核心にせまり、真宗安心の内実に深く立ち入ったお話で、その点が末寺でのお説教の多くが真宗入門的な内容であるのと違っていた。

しかも師のお話は真宗の教義を巧みに語ると言うことはされず、師の信仰経験に裏付けられた信心のほとぼしりから、お説教の中でしばしば阿彌陀仏は「そのまま念仏してこい、助ける仕事はミダが引き受ける」と、力強く実感を込めて阿彌陀仏の仰せを取りつがれた。激しめせず、弱々しくもなく、阿彌陀の第十八願である(念仏往生の願)を中心にお説きになり、ことに宗祖の「親鸞におきては、ただ念仏して、阿彌陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり」の思召しを必ず話された。

こうした真宗の救いをストリートに語られるとともに、師は念仏生活の実際をいろいろ具体的に語られた。たとえば、「この世でいろいろ困ったり苦しんだりするのは、自分に出来ないことに手を出すからである。出来ないことは阿彌陀仏におマカセして、できることをすればいい。要するに(出来ないことはするな、出来ることを一生懸命する)という自然な生活が念仏の生活である」と言われた。

実際、私たちは出来ないことをしようとして苦しむことが多い。たとえば、相手のいやな性格を変えようとしたり、自分と異なる考えを押しつけて他者の考えを無理に変えようとしたりして、それが出来ない時、煩い悩むことが多い。そういう時は無理に相手を変えようとするよりも、相手は変わらないまま、自分の方の受けとり方を変えていく方に重点をおくことにな

かといって、何もしないのではなく、物事があるべきようにと願って工夫をしながら、じつと静かに耐えて「時を待つ」のである。

こうして自分の思い通りにならないところは、阿彌陀佛のお計らいにおまかせし、念仏申していくのみである。

聖人は、どうすることもできないところは「佛天のおんハカライにまかせよ」と教え、下さっている。仏天とは仏、阿彌陀仏のことである。仏のことを第一義天ともいうからである。

こういう生き方は仏教一般では「因縁にしたがう生き方」と教えられてきた。

正信偈に学ぶ問答

(五十六)

ある学校で、生徒たちが楽しみにしていたピクニックの日の朝、生徒たちが学校に集まっていた時、天候が急に変わり風雨が強くなつて外出は困難になった。みんながぶつぶつ不平を言い始めた時、その学校の校長が「晴れの日が晴れた日の過ごし方があり、雨の日も雨の日の過ごし方がある。これから体育館でみんなスポーツをして楽しもう」と話しかけ、その日は生徒たちはスポーツを楽しんだ。

晴れの日も雨の日も雨の日の縁に従い、雨の日は雨の日の縁に従つて、臨機応変に対処していく。自分の願望に固執せず、出てきた現実に従つて、その中で自分のやることを精一杯する、という自然な生き方、それが「因縁にしたがう生き方」であろう。

自分の願望に固執したり、計画にとらわれたりして、その場その場に出てきた事実に従わず、無理矢理につっぱらうとすると自他を苦しめる結果になりかねない。

お念仏の生活もそういう「因縁にしたがう生活」におのづからなっていく。

そうして自分のできないことの一番大きな事は、(生きたいけど死なねばならない)、(死んだらどうなるのか、どこへいくのか)という死の問題、そして(自分の心を自分で変えることが出来ない)という煩惱の問題。これが私たちの人生の根にある限界であり、自分の手の及ばない、どうにもならぬ事柄である。

その問題に対して、南無阿彌陀仏は

「お前の力ではどうすることも出来ない。お前は私が引き受けて、かならず浄土に至らしめる。また、お前の煩惱は残らず浄化して仏の心にするから心配するな。お前は我にまかせてそのまま念仏するだけでいい」と仰せ下さっているのである。

こうして自分の手の及ばぬ人生の根本問題を阿彌陀仏におまかせし、私はこの世で出来ることを精一杯させていたのだのである。そういう人生における基本姿勢がおのずとお念仏の中から生まれてくる。だから念仏生活はおのづから「因縁にしたがう生活」になつていくのである。

しかしながら、日頃このように仏法を聞いていても、不如意なできごとと遭遇すると、なんとか自分の都合のよいようにしたい、自分の願いをかなえたい、というハカライがどうしても出て来るのが凡夫の有様である。

ただそういうなかで、いろいろな壁にぶつかつて苦しむ時、南無阿彌陀仏を称え聞くそこに、

「どっちへどう転んでも、アミダのいのちの中なんだよ」「お前のものは、なにもない。計らわれ導かれていなのだ」という阿彌陀仏の御はたらきを聞き、その都度ほつと一息をつかせていただく。苦しい中にも阿彌陀様がついていて下さり、私の存在を根源からおさめ取つて下さっていること、そのことがまことに有難く知らされるのである。

こういう形で、あれにぶつかり、これにぶつかりしつとおのずと因縁にしたがう念仏生活になつていくのである。

(了)

源信広開一代教
偏帰安養勸一切
専修執心判浅深
報化二土正弁立

(書き下し) 源信、広く一代の教を開きて、ひとえに安養に帰して、一切を勸む。専修の執心、浅深を判じて、報化二土、正しく弁立せり。

(語句)

一代教——釈尊一代の教え。
安養——阿彌陀仏のお浄土。
一切を勸む——一切衆生に念仏往生をお勧めになる。
専修の執心——専修の執心、雑修の執心のこと。
報化二土——真実報土と方便化土のことで、真実のお浄土と、真実報土へ導くための仮の浄土のこと。
弁立——はっきりと区別し、解き明かすこと。

(現代語訳) 源信僧都は、釈尊の説かれた教えを広く学ば

れて、ひとえに浄土を願い、また世のすべての人々にもお勧めになつた。さまざまな行をまじえて修める自力の信心は浅く、化土にしか往生できないが、念仏一つをもつぱら修める他力の信心は深く、報土に往生できると明らかに示された。

○ 「次ぎに(専修の執心、浅深を判じて、報化二土、正しく弁立せり)のところをお話し下さい。まず専修とは」
D 「専修、雑修のことで、専修とは一向専修ということですが。称名念佛の一行を浄土に往生する行として専ら称えることです。雑修は、雑多な修行、すなわち諸善諸行を浄土往生の行として修することです」
N 「雑多な行とは」
D 「經典を誦読するか、坐禅をするとか、加持の行とか、布施の行とか、造寺の善とか、不殺生の善など、さまざまの諸行や諸善を行うことによつ

て浄土に生まれようとするこ
とです」

N「では〈専修の執心〉とは」

D「専修の執心、雑修の執心
という事です。執心とは
〈執り持つ心〉です」

N「この場合、何を〈執り持
つ〉のですか」

D「専修の人は称名念仏の一
行を往生の行として執り持つ
のであり、雑修の人は人間の
行うさまざまな修行や善を執
り持つのです。しかし、同じ
ように執り持つのですが、専
修念仏の人と雑修の人はその
心に〈浅深〉いわば浅い、深
いがあり、専修の人の執心（
執り持つ心）は深く、雑修の
人の執心は浅いと仰せられる
のです」

N「なぜ、専修の人の執心は
深いのですか」

D「この場合の専修の人は、
もともと阿弥陀仏のお誓いで
ある念仏往生の誓願、すなわ
ち〈ただ念仏するばかりで助
ける〉という大慈大悲の誓い
を聞いて、〈無知無能で煩惱
の始末もつかないこんな私
に、阿弥陀仏はただ念仏する
ばかり引き受ける、助けると
誓って下さっていたとはなん
という有難いことであろう
か〉とナムアミダブツナムア

ミダブツと、称える一つ、タ
ノム一つとなつて、専ら念仏
申すばかりとなつてしまつた
人です。そこには阿弥陀仏の
本願をふたごころなく信じる
信心が発起し、その信心が専
修の人の執心となつていま
すから、深いのです」

N「〈深い〉というところを
もう少しお話し下さい」

D「専修の人の執心となつて
いる念仏往生の願を信じる真
実信心は、阿弥陀仏の大慈大
悲の心が凡夫の心に届いて信
心（執心）となつていますか
ら、それはもう揺れ動く凡夫
の心ではなく、壊れることも
なく、途絶えることもなく浄
土に導き入れて下さる信心で
す。だから専修の人の執心は
深いのです」

N「では雑修の人の執心はど
うですか」

D「雑修の人は、經典を誦誦
するとか、坐禅を行うとか、
三密加持を行うとか、布施の
行を行うとか、そうした雑多
な諸善諸行を行うことによつ
て、浄土に生まれたいと願つ
て修行するのですが、そのへ
執り持つ心〉すなわちこれら
の修行をやり遂げて往生した
いとがんばる心は凡夫の心で
すから、病気になるったり、怠

け心が起こつたり、他の誘惑
にあつたりすると、その執心
は動揺したり、弱くなつたり、
あるいは壊れたりします。で
すから凡夫のがんばりによつ
て起こすような執心は〈浅い〉
といわれるのです」

N「そのことを、ここで〈専修
の執心、浅深を判じて〉とい
われるのですね。ではそれに
続く〈報化二土、正しく弁立
せり〉とはどうつながるので
しょうか」

D「まず専修念仏の人の信心
はその本質が佛の大悲の願心
であり、同じ阿弥陀仏の願心
によつて仕上げられたのが報
土という真実の浄土ですか
ら、信心は浄土に生まれる正
因であり、浄土に生まれると
真実報土を感得することがで
きるとお聞きしています」

N「では雑修の人の執心は」

D「雑修の人の執心は凡夫の
側が起こすところの、浄土に
生まれたいという願心であ
り、諸行を励んで助かりたい
という自力の信心です。ただ
阿弥陀仏は、そういう自力で
あつてもまじめに浄土に生ま
れたいという願いを起こし修
行をする者をも、なんとか真
実の浄土に導いてやりたいと
いう広大な大悲の心から、化

土という浄土を仮に設けら
れ、そういう雑修の人をもそ
こへ生まれさせて、そこで養
い育てて、真実報土に生まれ
させようとまでされるので
す。そういう願を阿弥陀仏の
第十九願と申します」

N「化土とは」

D「化土は真実の浄土ではな
く仮の浄土で、真実の浄土に
生まれさせるために仮に設け
られた教育的な場所の意味を
もつた領域と説かれていま
す」

N「どこまでも自分の力をた
のみにし、自分のなす諸行や
諸善をもつて浄土に生まれた
いという、そういう者をも阿
弥陀仏の大悲によつて、化土
に生まれさせようとまでして
下さるのですね」

D「ええそうです。化土に生
まれる人は真実浄土を感得す
る智慧がなく、それぞれの持
つている想念に深く影響され
ますから、真実なる浄土の功
徳を感知することができない

のであり、そういう状況で感
じる浄土を化土と仰せられて
いるのであります。です
からどこまでも化土は浄土へ
の途上の領域であります。し
かしそこに、そういう自力疑
心の強い凡夫を化土まで用意
して救おうとされる阿弥陀仏
の限りない慈悲を感じざるを
得ません」

N「源信様はそれで〈報化二
土〉を説かれたのですね。で
は〈正しく弁立せり〉とは」

D「専修の執心によつて、生
まれゆく領域に、報土と化土
がわかれることをハッキリと
お示しになつたということ
です。それによつて、源信僧都
は雑行で往生しようという自
力へのとらわれ心を批判さ
れ、阿弥陀仏の本願念仏一つ
を信じて専修せよとお勧め下
さつたと、仰せられるのであ
りましょう」

(了)

《聖典学習会》

毎月六日（午後七時始）

担当 住職

*テキストは寺でも用意できますが、入手可能です。
テキストを読んで話し合います。

木村無相さんの法信 ⑬

一九八二年八月三十日（月）

半盲 無相

*

（前半部分を欠いています）

自力とも他力とも、カラ念佛ともアクビ念佛とも、考えなくていい、ただ「ナムアマミダブツ ナムアマミダブツ」と九官鳥が人間に教えられて、心には関係なしに、ただ、口に、声に、

ナンマンダブツ ナンマンダブツと、ただ「発音」するように、ワレワレも、「よき人の仰せ」「ただ念佛してミダに、引受けてもらえよ」との仰せのまんに、

念佛称え称え、地獄におつるか極楽にまいれるのか、ソンナコト、考えなくてもいいんです。

こう称えたら自力の念仏か他力の念仏かなど、我がココロの状態なんか、どうでもいいんです。ただただ「よき人の仰せのまんま」「ただ念佛せよ」との仰せのまんまにナンマンダブツと、発音念佛するだけなのであります。

そうすると、それが、ハカラズも、そのまんまで、「信の念佛」「ハカライの無い念佛」「おまかせの念佛」になつて

いるのです。ワレから、「信の念佛を称えましょう」「信の念佛を称えなければいけない」、ワレから、

「ハカライの無い念佛を称えましょう」「ハカライの無い念佛でなくてはいけない」

ワレから

「他力の念佛を称えましょう。自力の念佛はイケナイ。他力の念佛でなくてはいけない」

ワレから

「オマカセの念佛を称えましょう。おまかせの念佛でなくてはいけない」

などと考えする必要も、そうしようとする必要もないのです。これではイケナイというようなことも、ナニ一つ無いのです。

ただただ、よき人の「ただ念佛してミダに助けられまいらすべし」との、仰せのまんまに、こちらは、ワレワレまったくの凡愚は、ただ「発音念佛」するばかりです。

「よき人の仰せ」を聞いて、コチラはただ発音念佛申すばかりで「生死出離」については、全く無力の、ワレワレに、「責任」があるのではないのですよ。

「ただ念佛せよ」

「ただ念佛してミダに助けられまいらすべし」

と言われる「よき人」に責任があるので、ワレワレに、責任があるのではない。そう言う「よき人」に、モトを正せば

称我名字と願じつつ

若不生者と誓われた

如来法蔵様、

念佛往生、念佛成仏をお誓いになった。

「設我得仏 十方衆生 三心十念 若

不生者 不取正覚」

とお誓いになった。善導さまによると、若我成仏 十方衆生 称我名号 下至

十声 若不生者 不取正覚

とお誓いになった、如来法蔵様に、ワレワレの「生死出離」についての責任があるので、「生死出離」については、ワレワレとしては、

「汝の生死出離についてのことは、一切、このミダが引受けてシマツをつけるから、このミダに、まるなり、まかせて汝はただ念佛せよ」

と仰せられる、如来法蔵の「仰せのまま」に、「よき人の仰せ」のままに、ワレワレは、ただ全く、無責任に、「わが身の生死出離」とは言え、「生死出離」について、全くの無能・無力の、ワレワレは

「汝の生死出離はこのミダが、マルマル引き受けるぞよ。汝は、ただ発音念佛せよ」

の仰せのまんまに、「生死出離」については如来様の全責任として、ワレワレはただ、仰せのまんまに、発音念佛申すだけ、無責任に、念佛申すだけ、み名を称えるだけのことなんです。それを「称えたら助けるが、称えなくては助けん」といったような、キュウクツなことではなくて、ただ称えよと仰せられるだけのことなのであります。

○

それだから、香樹院師も、サダ女がどうしても信じられませんが、ウタガイ晴れませんが、聞こえませんがいかがいたしましよ。

と言ったことに対して

そのまま、ただ称えるだけ、そのホカ

にナニもいらぬぞよ

と仰せられたのでありましよう。

「生死出離の責任」は

ただ念佛せよ

と仰せられる如来が、ワレワレ、生死出離について、全くの無能、無力者の「生死出離」については、全責任を如来が全部、負って下され、引き受けきつて下さることゆえ、その上での

ただ念佛せよ

の仰せゆえワレワレとしては、仰せのまんに

ただ念佛申すばかりなのです。ね。

それで『求法用心集』に和上が

往生のことは引き受けるから、ただ念佛申せ

の仰せじゃという意味のこと、申されているのではありますまいか。

○

（歎異抄）第二條に

ひとえに往生極樂の道を問ひ聞かんがためなり

と仰せあつて、その往生極樂の道としては、「ただ念佛一つ」とのこと、

「念佛よりホカに往生の道をも存知し、また、法門等をも知りたるらんと心にくくおぼしめして、はんべらんは、大きなアヤマリなり」

と聖人が仰せあるのは、

如来が、念佛一つにて、ワレワレの生死出離については、全責任を負いたもうゆえ、ワレワレは、仰せのままに、「ナムアマミダブツ」をただ、ナムアマミダブツ

といたくばかりで、生死出離についての責任は全部、如来が負いたもうということではありますまいか。（続く）